羽山久男　著
『徳島藩分間絵図の研究』
古今書院　2019年12月　463頁　15,300円＋税

本書は，徳島藩において主に19世紀前半にまとまって作成された「分間絵図」のうち，とくに村絵図を主な素材として当時の景観を復元することを目的としている。あとがきによると，著者がこうした分間村絵図に注目するようになったのは，1979年に刊行された『上勝町誌』の編纂に関わったことにあったという。そのおり，役場において閲覧した文化年間の分間村絵図（1800分の1）に対して強い印象を抱いたことが本書のはじまりであるという。その絵図は巻頭における口絵の最初に掲げられており，著者の長年にわたる資料への思いをうかがい知ることができる。

ところで，著者は本書に先立つ2015年に『知行絵図と村落空間－徳島・佐賀・萩・尾張藩と河内国古市郡の比較研究－』を刊行している。ここで扱う「知行絵図」とは，地方知行制の実施された藩領において，大名の直轄地と家臣の給地の区別を図示したものを意味し，それを素材に空間構造とその変化や関連する社会構造を明らかにするというものであった。その関心のはじまりは，上記の文化年間の絵図とともに，こうした相給や村の景観を詳しく描いた「文久２年名西郡白鳥村絵図」を調査したことにあるといい，その独自性に注目して研究を進めることとなったという。

さて，本書は1975年以来蓄積されてきた論文や報告をベースとしてまとめられたものである。それらは，序章と終章を加えた計23章で構成され，さらに「岡崎三蔵の測量術」「熊本・佐賀・萩・鳥取・金沢藩の実測絵図」「徳島藩の分間村絵図と土木・宗教的景観」の順として３部に分けられている。以下では，これら本書の内容について，特に評者の関心に従い，近世の測量術に関する点から主に紹介することとしたい。

第Ⅰ部の「岡崎三蔵の測量術」は，対象とする分間村絵図の史料批判的検討として6章にまとめられたもので，特に近世後期の徳島藩における岡崎三蔵の地図作成技術を中心に紹介する。岡崎三蔵は代々徳島藩の絵図作成に関わったとされる岡崎家の４代目にあたる人物とされ，藩の役人（測量方）として事業に関わったとするが，実際に分限帳などで確認できる情報も乏しく，不明な点が多い人物といえる。

第１章では，岡崎家にあった文書を明治末頃に書き写したとする『岡崎家文書 全』（日本学士院蔵）や『阿淡両国絵図面』（徳島県立図書館蔵・呉郷文庫）を主に用いて同家の事績を検討し，従来から指摘されているように，岡崎三蔵以前の来歴における内容の不自然さと，それ以降の明治中頃までにおける地図の作成実績を紹介し，徳島藩における文化期以降の実測図作成事業に対する岡崎家の貢献を示す。また，その測量術の系統は清水流測量術であることを指摘するとともに，盤針術と量盤術の関係を紹介する。ただし，著者は両術の位置づけを『量地指南』の記述内容に沿って行っているが，盤針術は中国よりも西洋由来の測量術であり，また，量盤術の記述が多いものの実際の地図作成の現場においては後述のように盤針術を有用したと評者は考えている。

第３・４章においては，この岡崎三蔵がまとめたとする稿本を用いて，分間村絵図の作成に関わる測量と製図の技術を検討する。ここで取り上げたのは，①『図解 南阿測地法』（1799（寛政11）年，徳島市立徳島博物館寄託・蜂須賀家文書）と②『図解 南阿量地法国図付録』（19世紀初め頃，徳島県立図書館・呉郷文庫）が主なものとなっている。

第３章は，主に稿本①を中心に紹介している。全7巻で構成される稿本①の内容は，清水流測量術書をベースとしてまとめられたもので，特に巻之七「国図用法」は清水貞徳による『図法三部集』（1686（貞享３）年，東北大学附属図書館・林文庫）の「勘之部」と同じと指摘されており，その関係の深さが知られる。清水流測量術書の内容は量盤術と盤針術に大別されるが，前者の割合が多いのが特徴といえる。その特徴を稿本①も反映しており，それゆえ第３章は量盤術を中心に紹介した内容となっている。

ただし，元禄期前後に成立した清水流測量術書において，国絵図の作成における測量は盤針術による周囲測量と交会法が基本とされている。それは，現地で直接盤面上に縮図を描く量盤術に比べ，方位角や距離などの測定結果を野帳に記録した後に別の場所で縮図を描く盤針術のほうが，広域図を作成するうえで適切であったからである。

また，この時，主に用いられた磁石方位盤が「規矩元器」であり，それは開閉する2本の木組みの中央に「小丸」（方位磁石，1支の10等分，120分割）を据えて方位を見込む構造となっていた。

そして第4章では，稿本②を軸に，稿本①も加えて検討する。稿本②は一般的な測量術書である稿本①の成立後に，阿波・淡路国における分間絵図の作成に際してまとめられたものであることから，本章はより具体的な作業内容を示している。その内容をまとめると，まず，測量の実施は，村への通知を経た後，外周の村境から盤針術の測量を始めるとし，その外周の測定距離は図の凡例に示されることとなった。その際，「規矩元器」と同じ磁石方位盤である「方針桁」「小丸桁」を基本的に使用するほか，地形の険しい場所では「杖石」の使用や根発による距離の測定もあったとした。これらはいずれも清水流測量術に共通する内容であることを指摘できる。

また，絵図の色分け凡例について，山・川・マツなどの地形や植生，耕地や水路，萱や瓦屋根の家と土蔵，寺社など，土地利用や地形が詳細に描き分けられることを紹介し，景観復元資料として有用なことを示している。

そのほか，第2章では，徳島藩領内において，1808（文化5）年に伊能忠敬一行らにより実施された測量の過程と，それと岡崎家との関わりについて紹介している。この時の岡崎三蔵の息子・夫左衛門（宣平）の偽名による測量隊への参加や伊能測量へのコメントは不自然な印象を拭えないものの，その交流が徳島藩における分間絵図作成事業の推進や測量器具の改良を促した可能性もうかがえることから，両者の関わりについての検討が必要であろう。また，第Ⅰ部の最後では，本書の扱う分間村絵図の精度について第5・6章で検討するとともに，現存する分間絵図のリストを掲示し有用である。これら第Ⅰ部の検討は，景観復元研究における分間村絵図の有効性を確認するものであった。

続く第Ⅱ部の「熊本・佐賀・萩・鳥取・金沢藩の実測絵図」では，徳島藩の分間村絵図との比較を意図して，近世後期における代表的な実測的村絵図の事例を中心に5章に渡って紹介している。これらの事例は，岡崎三蔵と同時期に存在した地図測量家の事例と藩における統一的な村絵図の作成事業を紹介したものとなっている。

まず，地図測量家として，肥後藩の池部長十郎らや加賀藩の石黒信由を取り上げ，彼らが盤針術を行使して作成した藩政用の実測図や伊能忠敬一行との交流について紹介する。また，統一的な村絵図の作成事業としては，萩藩の18世紀前半における一村限明細絵図，佐賀藩の18世紀後半と19世紀中頃における郷村絵図，鳥取藩の19世紀中頃における田畑地続全図，加賀藩の19世紀前半における内検地の実施を紹介し，こうした事業が主に財政面での藩政改革の一環として領内における耕地の再調査（地押）を目的に実施された場合の多いことを示す。

第Ⅱ部においては，徳島藩との比較の視点は特に示されていないが，最後の終章で検討されており，後に紹介する。これらの事例は徳島藩における分間村絵図の作成事業を位置付けるうえで参考となる事例といえる。こうした藩における統一的な実測村絵図の作成は，19世紀前半頃に集中しており，その多くが伊能一行らによる測量の実施後となっている。ただし，盤針術の測量において，他藩や伊能の場合に比べて，岡崎三蔵らが使用したのは規矩元器に類する古いタイプの磁石方位盤であったという点は，そのルーツや技術の伝播を考えるうえで興味深い。ちなみに，仙台藩では文政期に統一的な分間村絵図の作成事業が実施されたが，それは徳島藩の事例と同様の小丸タイプの磁石を用いたことが分かっている。

そして，第Ⅲ部の「徳島藩の分間村絵図と土木・宗教的景観」では，主に阿波国の分間村絵図を素材として，土木的景観（棚田や新田などの耕地，水路や溜池などの水利施設，塩田，町場など）と宗教的景観（社寺，巨石，信仰物など）の復元を10章に渡って検討する。本書の研究のはじまりが，絵図の実地調査を契機としたとするように，これらの検討は分間村絵図の丹念な調査や分析に基づくものであり，それは特に絵図のトレース作業を重視し，関連する文書や地図・空中写真と比較するものであった。

第Ⅰ部で確認したように，正確な分間村絵図の存在は，景観を復元するうえで，場所の比定を容易にするものであった。その結果，著者が指摘するように，統一的に分間村絵図の作成された徳島藩領内においては，近世後期における自然・文化

景観をミクロな視点から復元することが可能であり，そのことは第Ⅲ部において多くの多様な場所の復元事例が紹介されていることに示されている。

また，分間村絵図の事例から測量に関して確認できることとして，測量に際して隣接する村との境界を確認（覚の取り交わし，境界印の設置など）したこと，高低差（勾配）への配慮があることなどを示しており，分間村絵図を作成するうえで村境を対象とした周囲測量を実施したことが改めて確認されている。そのほか，岡崎らによって天保期に実施された測量に際し，対象となった村から銀札が支払われたことを紹介しており，その事実は藩政上における分間絵図の位置を考えるうえで，興味深い出来事であるといえる。

最後の終章は，本書のまとめと課題を示すものとして記されており，特に岡崎三蔵らによる測量術や分間村絵図の位置づけを中心としている。この徳島藩における分間村絵図群の特徴の一つは，その作成が郡図および国図の編集につながることであり，地域的には阿波国から淡路国へと展開するものであった。こうした分間絵図群の作成について，著者は徳島藩における「行政的基本図」の整備事業と位置付け，他藩の事例と区別する。また，岡崎三蔵の測量術が清水流測量術や村井昌弘の『量地指南』からの影響があるとし，その古さゆえに同時期の測量器具と比べて精度的に見劣りするとした。

これまでにも指摘されてきたように，岡崎三蔵とこれら分間絵図群には不明な点が多く，それは関連する資料の乏しさによるものであった。しかし，多くの分間絵図が作成され，その一部（全体の約17％と予想）が今に残されているのは事実である。こうした状況に対し，本書は，残された分間絵図の価値とその活用について提案するというものであった。

（鳴海邦匡）